

目的 昭和40年代までの秋田県における農民の衣生活は、皆「着つまり」の「のらぎ」が主体であり、それがふだん着の役目も兼ねていた。のらぎのこのような二面性は山が国農業の特質ともいえる生産労働と日常生活の束縛によるものである。このような生活条件の中で農村婦人達は、のらぎに多くの工夫をこらし、地域農業にもっとも適合する形態をつくりあげてきた。その第一は機能性で、次に至適性、さらに美意識である。しかし第二次大戦後の農業及び農村社会の急速な変化に伴い、のらぎもまた工業的大量生産による画一的な既製作業衣へと変化した。しかしこれらの作業衣はかならずしも個々の地域農業に適するとはないがたい。今後は真に農村婦人の要求する作業衣の開発が望ましく、そのためには最近まで着用されていく従来ののらぎの再検討が必要であると考へ、この研究に着手した。今回は秋田県南部の田村地方ののらぎについて報告する。

方法 昭和34年、50年、52年と田村地方の1市4町村において、残存するのらぎの実態調査ならびに、40才から70才迄の農村婦人と対象に、岁々とり調査を行なった。

結果 田村地方ののらぎは、かぶりもの、上半衣、下半衣、付属小物類、袖なしなどによって構成され特有の名称があった。つぎに特徴的なことは、かぶりもので黒または紺木綿の細長いの布片を用い、頸部から顔面を広くサに包みこむ。これは、はながあ、はなをくべ、ふくめんなど、とよばれ陽射しを防ぎ、かつ汗どめ、風よけなどの効果が大で、今なお多くの農村婦人が用いている。このかぶりものは、隣接する山形県酒田市の、ほんこなどとはほとんど同型であるが、その染料と伝播についてはかならずしも明らかでない。